

Title	「満刺加館訳語」について
Author(s)	崎山, 理
Citation	大阪外国語大学学報. 20 p.197-p.214
Issue Date	1968-12-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80334
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『滿刺加館訳語』について

崎 山 理

On the Chinese – Malacca Malay Vocabulary in the Inaba and the Awakuni Collection

Osamu Sakiyama

The Chinese-Malacca Malay Vocabulary included in so called Hua-i i-yü 華夷訳語 consists of the different kinds of texts; one of them is contained in the Morrison collection, whose list of words and phrases was identified with Malay in the E.D. Edwards and C.O. Blagden's paper (BSOS. 6), but it is evident that the another Malacca Malay Vocabularies belonging to the Inaba 稲葉 and the Awakuni 阿波国 collection in Japan do not record Malay.

This paper is intended to study what language was recorded in the latter. By comparing the Malacca Malay with the Chinese-Cham Vocabulary in the same collections, I have found many words wholly coinciding in Chinese characters, some of them can be solved not only by Cham, but also by Achehnese or *Orang laut* languages (especially, Moken) : <many> 羅 *luo* Ach. *le*, Ol. *rad*, Ch. *lō*, *lō*, <house> 榦, 桑 *sap* Ach. *sěng*, Ch. *sap*. According to H. K. J. Cowan's paper (BKI. 104), both Achehnese and Cham, which are undeniably of Malayo-Polynesian character but have been subjected to the direct influence of adjacent Mon-Khmer languages, retain the similar linguistic features. In the Malacca Malay, I can point out the following items : 1. Existence of consonant clusters, <river> 龍 *lyŋ* Ach. *kruëŋ*, Ch. *krauŋ* 2. No pre-nasalization for prefixes, <to write a letter> 麻蘇喇 *ma su la* Ach. *měsurat*, Ch. *mōsurak*, n.b. Malay. *měnyurat* 3. Double vowels, <tree> 格又 *cai iou* Ach. *kajěě*, Ch. *kayău*, n.b. Malay. *kayu*.

I come to the conclusion that the Malacca Malay was made basing on the Cham by the compiler who was not very well informed of Achehnese, but noticed resemblances and differences between these two languages. Although some words including the chapter of Current Phrases are merely Cham, while there are also many words which can be solved only by Achehnese or Moken : <small> 不吉 *pu tɛi* Ach. *batjut*, <to go, to come> 撒 (撒?) *sa* (*tɕ'is?*) Ach. *dja'*, <daytime> 中 *tɕuŋ* Mo. *chěng*, <bamboo> 哈陰 *ha im* Mo. *kaun*. Besides,

so far as the compiler became aware of differences between two languages, he added the modification as small as possible to Chinese characters of the Cham, even if the Chinese sound did not exactly stand for the Achehnese sound : <thunder> 胡浪 *zulaŋ* Ach. *guròh* (the Cham, 浪 *gram*), <hot> 八答哈 *pa ta ha* Ach. *pědéh* (the Cham, 八答 *padiak*). This is why I conclude that the compiler made use of the Cham at the time of editing the Malacca Malay.

I. 華夷訳語に含まれる満刺加館語は、石田幹之助氏によって三種本と名付けられた写本のうちの八本に存在する。そして満刺加館訳語はこの三種本においてのみ存在する。⁽¹⁾ これらの中で筆者がその全部を参照し得たのは、稲葉君山氏本、阿波国文庫(不忍文庫)本、ロンドン本、又、その内容の一部を知ることが出来たのは、静嘉堂本である(以下、稲、阿、ロ、静と略)。⁽²⁾ この四本のうち、稲、阿は漢語の分類、配列、漢字の表記法共に数ヶ所の漢字の相違を除いて等しく、又、その総語彙数も476と同じである。一方、静もその漢字に片仮名がふってあること以外に上の二本と内容、誤字の形式まで同じくしているようであって、この三本は同系統の写本と考えてよい。しかるにロの方はこの三本と配列、内容を異にするのみならず、たとえ同じ漢語があるとしてもそれに対して「満刺加語」を示すために記された漢字は、ほとんどのものが一致を見出し得ないほど違っている。又、その総語彙数は482である。このロに対してはEdwards及びBlagdenが試みたように現代のマライ語をもってして容易にその漢字に引当てることが出来、又、その当時に記録されたマライ語の文献、語彙集によってもそれを確かめ得る。⁽³⁾

それでは稲、阿、静の三本は一体何語を記録したと考えるべきであろうか。ロと共通する漢語のうち、例えば次のような語例に対していずれもマライ語を当て得るかの如きである。<石>ロ53巴都;稲3ウ不頭 *batu*, <土>55答那;4オ打納 *tanah*, <木>113加右;7ウ格又 *kayu*, <銀>420必刺;18ウ必喇 *perak*。しかし三本に対してマライ語のみを基礎としたそのような作業は、以上のような若干の例を除いて困難となる。この三本が対象とした言語は、マライ語的ではあるがマライ語ではないある外の言語であったと考えざるを得ない。

II. この訳語の地名となった満刺加が歴史上に現われるのは、『明史』巻325列伝第213「満刺加伝」の記述をもってその嚆矢とする。同書によれば、もともと王も居らず国名もなくシャムに從属していたこの地方に永楽帝が使節として伊慶を遣わし、尊長の拜里迷蘇刺 (Parameswara)⁽⁴⁾ が永楽3年(1405年)に初代の満刺加国王に封じられ、彼の死後、国王はその子の母幹撒于的児沙 (Mëgat Iskandar Shah)⁽⁵⁾ 永楽12~22年(1414~1424年)), 三代目は西里麻哈刺 (Sëri Maharaja, 永楽22年 ~ 正統10年(1424~1444年)等々と続いた。そして1511年ポルトガル人 Alfonso d'Albuquerque の攻撃によってこの王国が崩壊するまで大むね安泰であった。満刺加国の言語状態について知り得る資料として『瀛涯勝覧』(永楽14年(1416年))の「満刺加国」の条に「其国人言語并書記婚姻之礼頗与爪哇同」という説明があり、その文中に次のような語彙を見出すことが出来る。「打麻兒、損都盧廬、沙孤、菱葦」。これらは現代マライ・ジャワ・スンダ語の *damar*

＜樹脂＞, sagu＜竹芋＞, kajang＜棕櫚葉の屋根＞と一致するけれども,⁽⁶⁾ 上記三本の満刺加館訳語は『瀛涯勝覧』に述べているようなジャワ島の言語、即ち、ジャワ語、スンダ語によっても解けないことは明らかである。

Ⅲ. 華夷訳語に含まれる凡ての訳語についてその成立年代は詳らかではなく、満刺加館訳語もその例にもれない。⁽⁷⁾ しかし訳語の内部からその年代を決定する一つの方法として次の事実に注目したい。稲12ウ＜太子＞不鉄的児沙, 13オ＜兒子＞干的児沙という例においてここに共通する(干)的児沙という漢字をマライ語のみならず附近のどの言語をもってしても解くことが出来ない。しかし上述の二代目王、母幹撒干的児沙と共通した漢字の後の部分に注意するならば、皇子に対して普通名詞でなく固有名詞、つまりその当時の呼び名を記入したのではないかと考えられる。この解釈に従うならば、不鉄的児沙 (pu t'is ti r ʃa)⁽⁸⁾ は Paté' (Iskan)dar Shah のことであり, paté' (アチェ語。マライ語: patik, pateh) はもとの意味は奴隷、そして王族の者に対して附ける一人称の謙譲語として用いられている。但し、＜兒子＞に対して干的児沙とあるのは、編者の「満刺加館」に対する無知に発するものであり、ただ単に不鉄 paté' を敬称とみなして(干)的児沙を＜子供＞の意味に類推したことによるのであろう。故にこの訳語は初代王 Parameswara, 王子 Iskandar Shah の在世中に、即ち、永楽3～12年(1405～1414年)に作成されたと考えることが出来る(尚、満刺加館の崩壊まで Iskandar Shah という名を持ったのはこの二代目王のみである)。

Ⅳ. 満刺加館訳語の研究に際して対照せざるを得ないのは占城館訳語である。この二訳語を比較するならば、その間に単なる偶然の一致とは考えられない全く共通した漢語、漢字の多いことにまず気付く。このことは満刺加館訳語が占城館訳語を元にして作られたということを推定させる。その中にあって満刺加館訳語においても占城館訳語の対象となったチャム語によってしか当ててくることの出来ない語彙がある。^{(9)(補1)}

稲1ウ占11＜露＞者藍(tʃis lam) salim <dew>, 2オ31＜×出＞⁽¹⁰⁾ 閤(nau) nau <to go, to walk>, 2ウ47＜×大＞弄(luŋ) prauŋ <big>, 8ウ198＜馬＞阿謝(o sie) asaih <horse>, 11オ272＜紙＞把阿兒(pa o r)baar <paper>, 11オ277＜卓＞記(tʃi) kik <bench, chair>, 11オ278＜椅＞教(cau) čio'v <mat>, 11ウ283＜刀＞莊(tʃuaŋ) thaŋ <knife, dagger>, 12オ287＜扇＞打的(ta ti) tadi <fan>, 13オ326＜女兒＞姑媒(ku mei) kumēi <woman, girl, wife>, 17ウ489＜×飯＞喇塞(la sai) lasēi <boiled rice>。又、漢字に若干の移動がある次の例において。＜羊＞9オ別比(piə pi) 200 比別 pabaiy <sheep, goat>, ＜鷺＞阿9オ弓安(kuŋ an) 207 公安(kuŋ -) kagan <goose>, ＜筆＞11オ木格(mu cai) 275 木格兒 pakaiēi, pakēi <pen>, ＜鼓＞11オ撒根(sa ken) 271 撒根兒 sagar <drum>。成句としても次のような例が共通であり、チャム語にしか当て得ない。7ウ173＜芭蕉＞盆不的(p'uen pu ti) phun putēi <trunk of the banana>, 11ウ267＜大缸＞阿弄(o luŋ) ahauk prauŋ <large boat>?, 14オ364＜底頭＞把故阿箇(pa ku o ko) pakuk akauk <bend the head, bow>。又、チャム語的な表現法を伝えたと思われる次のような共通した例がある。＜弓＞11ウ納把納(na pa na) 291一納把納(i---) inō'

pano'h <mother of the arrow, bow>, 20オ545 <緑> 夜喇莫 (ie la muo) aih lamau <cow's dung>。チャム語におけるサンスクリット借用語が「満刺加語」にも現われている例として、<胡椒> 7ウ阿七喇不来 (o mie la pu lai)⁽¹¹⁾ 184阿七 amraik (←marica) <pepper>, 10ウ252 <門戸> 邦乃 (paŋ nai) baŋ (←vamsa) naih <small gate>, 15オ421 <身> 幸郎 (ɕiŋ laŋ) ɕarirak, sarirak (←śarīra) <body>?, 20オ556 <葱> 阿喇遜 (o la suen) lasun (←laśuna) <onion> がある。これらのサンスクリット借用形はチャム語にのみ通用していた。

以上のように一部占城館訳語からの脱字を含む全く共通した漢語、漢字の例の外に、漢語、漢字は等しくないけれども、この両訳語を対照することによってやはりチャム語と認めなければならない例がある。12ウ<大人> 13ウ<大哥> 弄郎 (luŋ laŋ) raŋ praŋ <great man> (cf. 313 <大人> 底国 taku <lord>), 13ウ<叔爹> 阿罵除愛 (o ma ɕis ai) amō' saai <father's elder brother, uncle> (cf. 12ウ322 <父親> 阿罵, 324 <哥哥> 除愛), 16オ<朝衣> 波波襖 (puo puo au) av, aɔ pu poŋ <clothes of the sovereign lord> (cf. 445 <衣裳> 襖, 578 <朝廷> 波波), 17オ<花幔> 看不寧 (k'an pu niŋ) khan paniŋ <cloth of curtain> (cf. 475 <手巾> 看, 474 <帷幔> 不寧), 15ウ <牙> 八喇 (pa la) bala <tusk> (cf. 433 <牙> 底該 [tagēi <tooth>, <象牙> 10オ黎慢八喇 (li man--)) 228八喇梨慢 bala limo'n <elephant tusk, ivory>))。

その他、占城館訳語には存在しないがチャム語によってしか当てることの出来ない例が若干ある。4ウ<×高> 光 (kuag) glaug <high> (cf. 84 <×高> 亮 riyā <high>?), 7オ<花> 嬌, 7オ<××花> 阿嬌 (o tɕau) ɕoh <numeral for flowers, half-opened flower> (cf. 158 <花> 阿?), 7オ<木> 吟當 (ha taŋ) kataŋ <bamboo> ? (cf. 160 <竹> 格又 kayāu <wood, tree>), 9オ <鳥> 班 (puan) barim <bird> ? (cf. 213 <鳳凰> 珍撥刁 čim? <bird>))。

尚、占城館訳語を元にした際、満刺加館訳語の作成に当って記入すべき行を取違えたと考えられる箇所が両訳語を比較することによって判明する。17ウ <不吃> 吝八崩, <醉了> 花喇塞, <吃飯> 八崩喇塞に対して、484 <不吃> 八崩 (pa peŋ) pak bo'ŋ <not eat>, 489 <喫飯> 花喇塞 (ɕua la sai) hɕak lasēi <eat boiled rice> から、満刺加館訳語の<不吃>は八崩喇塞と、<吃飯>は花喇塞と行が入れ代っていることが分る。又、上記の7オ<木> 吟當も同じく7オ<竹> 格又と行が入れ代ったのであろう。⁽¹²⁾

V. チャム語でしか解けない満刺加館訳語におけるそのような要素は、単に上述のような語彙的な面に限られるのではない。会話を表わした「通用門」においてもその凡てが共通してはいないにせよ、次のような例において占城館訳語と全く同じ漢字が現われている。

21オ590 <少說話> 敗的吉 (pai ti tɕi) pɕač, pɕéi dikik <Speak little, Talk less>, 21オ<称道那裡人> 584 <称是那里人> 哈勒把勒莫 (占: 倭) 郎 (ha lei pa lei muo (uo) laŋ) uraŋ palēi halēi <What country man>, 21ウ597 <遇有緊急事情> 閩馬來波波 (nau ma lai puo puo) nau mo'rai pu poŋ <Go (to) H. M. the king>。特に言語の核心的部分である禁止句、否定辭の用いられ方においても次のように共通する。21オ583 <休咳喇 (嗽?)> 綴不度 (tɕuei pu to)

juai, juai batuk <Don't cough>, 21才573<休生事>綴的(占:底)格来(tguei ti(ti) cai lai) juai, juai? <Don't cause trouble>, 15才 <×無>403<無>哈波(ha puo) pak <not, with-out>, 但し, 3才<無有>喇不沾(la pu tgiem) (cf. 55<無雨>哈波胡沾 pak hujan<it is not raining>) の喇に対してもチャム語の否定辞 dak を当てることが適当であろう。又, 前章の終りに記したように, 行の取違えによって<酔了>が吝八崩(lin pa peg)に対するものとすれば, この吝もチャム語の否定辞 di, dii に当るものと考えられ, di pak bo'g は二重否定, 全体として肯定となり<食べてしまわなくはない, うんと食べた>の意味において上記の漢語に対せしめられたものと思う。

Ⅶ. 満刺加においてチャム語がどの程度の勢力を持っていたのかは全く明らかでないが, 一般的に使用された言語はマライ語であったに違なく,⁽¹³⁾ 恐らく相当数の渡来者のあったチャム人をインフォーマントとして作られたこの満刺加館訳語もその非実用性又はチャム語の言語的後退の故に, 後にいわゆるマライ語を記録した口本の作成への契機となったのであろう。⁽¹⁴⁾ しかし以下において明らかにするように, この満刺加館訳語は単にチャム語のみを記録したのではなかった。占城館訳語における凡ての語彙がチャム語で説明されたのではないにしろ, 占城館訳語がチャム語をその対象としたことに問題がないとすれば, 稲, 阿, 静の満刺加館訳語がチャム語のみその対象としたことはあり得ず, 又, 清の王聞遠の『孝慈堂書目』に見える「十国訳語」に掲げられた各語彙の編者名によれば, 朝鮮館, 占城館, 満刺加館の各訳語の編者は毛寅という同一人であることからしても, 各国の言語差はこの編者によって十分気付かれていたであろう。(又, 同一の編者であったということは, 満刺加館訳語の作成に際して占城館訳語を元にしたという推定を可能ならしめる。)上に述べたように満刺加館訳語と占城館訳語とは共通した部分が多いにもかかわらず, 共通しない部分も少なくない。そこにこそ満刺加館訳語はチャム語そのものを記録したのではなく, その他に別種の言語要素をも介在させていることを認めざるを得ない。

Ⅶ. 満刺加の建国, 民族の往来に関して Tomé Pires の記すところによれば次のようである。⁽¹⁵⁾ 即ち, パレンバンの政争からシンガポールに逃げ来った Parameswara を満刺加国の建設に至るまで援助したのは, 既にその地に居住していた Celate (又は, Bajau) 人であった。⁽¹⁶⁾ 又, パセー国との間に繁しい関係があり二代目王 Iskandar Shah は72才になってパセー王の勧告のもとにイスラム教に改宗しパセー王の娘の結婚したとある。⁽¹⁷⁾ 満刺加国建国以来, これら漂海民, アチェ(パセー)人の往来はもとより, 移住者, 定住者も多かったであろう。彼等の言語の要素が満刺加館訳語に如何に反映しているかを次章から明らかにしよう。⁽¹⁸⁾

Ⅷ. H.K.J.Cowanは1948年の論文においてアチェ語, チャム語, モケン語についてマライ・ポリネシア語族に含めるべきであることを提唱しつつも, それらの言語における音韻上, 形態上の否定すべからざるモン・クメール語族との類似性を示した。⁽¹⁹⁾ 彼の掲げたアチェ語, チャム語, モン・クメール語比較語彙の中から, 満刺加館訳語の占城館訳語と漢語, 漢字共に共通した例に当ててを試みるならば, 次のようになる。(Aはアチェ語; Cはチャム語; M, Ol は漂海民語の略である。⁽²⁰⁾ M, Ol についてCowanはその例を掲げていないが, 対応するとみなされる語を

記入する。)

9オ208<鴨>阿合(占:阿答。合は答の誤字であらう)(o ta) A. (it'é) ara <小鴨>, C. ada<家鴨>, 19オ526<進表>八蘇喇(pa su la) M. ba, A. ba surat, C. ba surak<書類を持ってゆく>。9ウ213<鳳凰>真不刀(占:珍撥刁)(tgin pu(puo) tau(tiau)) A. tjitjém pòtê, C. čim putau <皇帝の鳥>, M. chichom, A. M. は語頭音重複形。10ウ<立柱>不登樛(pu tɛp saŋ) pǝdòŋ sǝəŋ<小屋を建てる>264<房柱>格又不登桑(cai iou---) kayău pado'ŋ saŋ<家を建てる木> (pǝdòŋ, pado'ŋ <建てる, 立てる> は夫々接頭辞, pǝ-, pa- の附いた形。⁽²¹⁾ A.dòŋ, C.do'ŋ <立つ>。又, Cowan の比較語彙の中には掲げられていないが, sǝəŋ, saŋ もモン・クメール系の語である。⁽²²⁾ 3ウ69<河>龍(lyŋ) A. kruəŋ, C. krauŋ <川>, 7ウ174<柑子>古怪(占:古恠)(ku kuai) A. kruət, C. kruöč<オレンジ>, 2ウ44<×多>羅(luo) A. le, C. lö, lö, Ol. rad<多くの>。(尚, 8オ<降真香>把納不格陋,<紫檀香>把納格格陋, 175<波羅密樹>把納格又に通して現われる把納(pa na) は A. panaiŋ, C. panat. M. panè' <波羅蜜>に当るが, これはサンスクリット panasa <波羅蜜樹>の借用語であって Cowan のようにこれをモン・クメール系の語とみなすのは誤りである。)これらの例において満刺加館訳語の編者はチャム語とアチェ語とのその類似性の故に漢字の記入に際して強いて変更を加える必要もなかった。しかしインフォーマントがチャム語アチェ語のいずれを報告したのかはこの例からのみでは分らない。

次に, 占城館訳語とは一致しないがアチェ語のモン・クメール系の語彙によつて引当てること出来る例がある。チャム語には当て得る語がなくアチェ語を写したことが明らかである。2ウ<×小>不吉(pu tɛi) A. batjut, tjut <小さい>, 3オ<下×>撒, 14オ<下××>的撒(撒の誤字?)(ti tɕ'is) A. dja', tǝdja' <行く, 来る>, 5ウ<秋>不藍不黃(pu lam pu zuaŋ) A. bulǝəŋ pǝkhuəŋ(pǝ-khuəŋ<乾いた>⁽²³⁾<乾燥させる月>(この例に対してはチャム語pa-khoŋ <乾いた>を当てることも出来る。但し, 124<秋>不藍不勒 bulan?), 14ウ<笑>好(ɣau) A. khém, kiém<笑う>? (C. khim <笑う>。但し, 394<笑>奔?), 2ウ<×吹>波(puo) A. pōt<風が吹く>, 13ウ<夫妻>愛線(ai siən)? tjén, tǝhén<愛する?> (C. khin <欲する>), 又, 15ウ<髮>櫻(tsug) A. (bulǝə) sua<綿毛, むく毛>もモン・クメール系とみなされる。⁽²⁴⁾

IX. 以上の例に対して次のようなアチェ語, チャム語に共通して現われる音韻的, 形態的要素は, 両者に共通するマライ・ポリネシア語系の語彙と共に, 満刺加館訳語がいずれの言語を記録したのかという推定を困難にさせる。それは以下の項目においてみられるであろう。

1. マライ語(その他, ジャワ・スンダ語など)に特徴的な現象の一つに語根に接頭辞が附いた場合, その間に起こる前鼻音化現象(nasale Ersatz<鼻音代償>及びnasale Zuwachs<鼻音増加>)がある。例えばマライ語 surat<手紙>を動詞化する場合, 接頭辞 mǝ- を附けて mǝnyurat<手紙を書く>とするが, その際 s- は ny- に変ずる現象である。ロ441<写字>に対して牛刺と当てゝあるのは(mǝ- に当たる部分は脱字?) mǝnyurat を指していることに間違いない(同

じく 325<聴>門能牙兒 mēnēngar (<mē-tēngar><聞く>もそのような前鼻音化現象を写したもの)。(25) しかし、アチェ語、チャム語においてはこの現象が見られず、19オ525<金葉表文>罵(占:八)答麻蘇喇 (ma(pa) ta ma su la) は A. mēsurat ōn (<daun> mēih<金の葉に文書を認める>, C. mōsurak patta (←サンスクリット patta?) <銅板に文書を認める>のように(26) A. mē-, C. mō- という接頭辞は語根に直接附いている。(27) 麻蘇喇という漢字に対して A. C. の区別をすることは難しい。しかし15オ<哭>麻答苦 (ma ta k'u) は明らかに A. mētangèh (<mē-tangèh> <泣く>)を表わしている (cf. Mal. mēnangis<mē-tangis. 尚, 401<哭>卓 čauk <泣く>。(28)

2. アチェ語、チャム語共に語のアクセントのない第一音節を脱落させる傾向が著しい。例えば、A. dēngò (lēngò) ~ngò <聞く>, aně'~ně' <子供>, C. dagan~gan <と共に>, halāu~lāu <頭>(29) の如く。このような語頭音脱落 (aphaeresis) の傾向はモケン語、漂海民語にも見られ、マライ・ポリネシア語の原初的な語根の形をむしろ語頭音の脱落した形が示していると考えられるが、(30) 現代語にあって語頭を脱落させ得るものとさせ得ないものとの規則は明らかでない。故に、訳語の次のような例において、漢字の脱字があるか否かを直ちに決定できない。3ウ<江>疾(70<海>細)(tsi(si)) A. tasé', C. tasik<海>, 4オ76<園>方(faŋ) A. kēbon, C. bo'n<庭>, 12ウ13オ<×人>郎(laŋ) A. urēng, C. uraŋ, raŋ<人> (但し、占城館訳語は317郎, 又は、333, 外で倭郎と記す) 又、満刺加館訳語にのみ現われる例として、8ウ<虎>猛(meŋ) A. rimuēng, Ol. ʔimao, Bed.Chiong. muēn(31), 14ウ<問>通(t'uŋ) M. metam, natam, Ol. tun, kutun, békutun <尋ねる>, 15ウ<脚>打匍(ta pu) Ol. po, bētampon<足>。

尚、同じ漢語に対して二種の漢字で記されている例がある。一語の漢字と二語の漢字とは、前者が上述のような語頭音の脱落した形を記録したのかとも思われるが明らかではない。但し、前者はその漢語が単独で用いられる場合に多く現われ、後者はその漢語を含む成句中に現われることが多いのは注目に価する。1オ<天>儀2オ<×天>喇儀(1<天>喇儀)(la i) A. langèt, C. lajik, 1オ<雲>因2オ<×雲>阿因(o in) A. awan (但し、チャム語は2<雲>夜阿因 aih aŋin <風の糞>のように awan に当る語ではない), 1オ<雨>沾3オ<×雨>不沾(又、1ウ<雪>胡沾も<雨>のことか?)(4<雨>胡沾)(pu tɕiəm, zu-) A. hudjēn, udjēn. C. hujan. 尚, 6オ<今>来6ウ<今×>胡阿(阿: 胡来が正しい)(xu lai) M. kelai <丁度今>, 更に、9オ<魚>流牙18オ<魚×>牙(liou ia) Bajau.(32) déiah は満刺加館訳語にしか見出せない例で、チャム語に当てることができない。

3. アチェ語、モケン語において語末が母音で終る語を鼻音化して-ŋにする傾向があり、A.ta-muē~tamòng <は入る>, bunga~bungòng <花>, M. binai~binèng<女, 妻>のように両形が用いられる場合の外、-ŋの附いた形に固定してしまったものもある。(32) そして現在ではむしろこの方が一般的な形となっている。例えば A. tanjòng (<tanja>)<尋ねる>, M. anong(<Mal. anu>)<何>。(33) 故に満刺加館訳語における次のような例に対して直ちにチャム語のみを当ててしまうことは出来ない。12ウ323 <母親>姨納(i na) A. inòng, M. ènong<母>, C. inō'

＜母＞, 13ウ363＜進貢＞魯麻答麻(占：答麻魯麻道麻)(lu ma ta ma (----^{キン}tau-)) A. tamuē(ta-mòng) rumòh ＜家には入る＞, C. tamō' rumo'h tauk mo'h ＜家には入つて金を置く＞, 17オ＜撒都細布＞看不阿必粗, 468＜西洋布＞不鉄不阿に共通する不阿(pu a) は A. bunga (bungò-ng), C. buḡō' ＜花＞に当てることが出来る (全体の意味については X. 1. を参照せよ), 19ウ539＜黄＞姑泥(ku ni) A. kunèng, C. kuñik ＜黄色い＞についても同様に考えることが出来る。⁽³⁴⁾

4. アチェ語, チャム語共に consonant cluster (破裂音+l,r) があり, 次のような例においてそれが現われる。3ウ69＜河＞龍(lyṇ) A. kruēng, C. krauṇ ＜川＞, 7ウ174＜柑子＞古怪(占：恠)(ku kuai) A. kruēt, C. kruöč ＜オレンジ＞, 7ウ176＜椰子＞古弄(ku luṇ) A. kruēng ＜竜腦樹＞?, C. ?, 14オ374＜跪＞屈(占：快)墩(tḡ'y (k'uai) tuen) A. trōn klat, C. trun khuai ＜膝を落とす＞。又, 満刺加館訳語にのみ現われアチェ語を写したと思われるものに, 2オ＜×影＞弄(luṇ) A. klam, Ol, kēlam ＜曇った＞, 4ウ＜水深＞牙墩(ia tuen) A. iē trōn ＜水が下がる＞?, 16ウ＜帶＞革衣(cai i) klaih ＜ベルト＞。⁽³⁵⁾

5. ロ2＜日＞哈利(ha li), 53＜石＞巴都(pa tu), 399＜米＞不刺思(pu la sī)⁽³⁶⁾ に対してマライ語の hari, batu, bēras を当ててことは, その漢字音に対しても問題が起こらない。しかし, 稲, 阿の1オ＜日＞仰不銳(niaṇ pu zuei), 3ウ＜石＞不頭(pu t'ou), 10ウ＜倉房＞不喇樛国(pu la saṇ kuei) はその漢字音から見てもマライ語を写したのでなく第二音節が二重母音化した(又, マライ語語末の-s が -h に対応する)⁽³⁷⁾アチェ語の njang uròè⁽³⁸⁾＜日神＞, batòè, brē-ēh ＜米＞を当てたと考えるべきである。しかしこれと同じ現象はチャム語においても見られ, 5＜日＞仰胡銳 yaṇ hurēi ＜月神, お月様＞, 63＜石＞不豆(pu tou)batāu, 261＜倉房＞不喇樛の不喇の部分 brah ＜米＞のようであって, 満刺加館訳語の以上の例に対して, 二重母音化(又, 語末の -h 音化)の現象からアチェ語, チャム語のいずれを記録したのかという推定を困難にさせる。次のような例においてもそうである。7ウ178 ＜樹＞格又(cai iou) A. kajèè, C. kayāu ＜木＞, 9オ203＜猫＞苗(miau)A. miē, C. mo'yau ＜猫＞, 13オ337＜奴婢＞阿的該喇(喇該の倒字?)(o ti la kai) A. adé' (adòè) lakòè, C. adēi lakēi ＜弟, 又, 年下の男に対する一般的呼称＞。

しかしアチェ語とチャム語とにおいて二重母音の現われ方は同じではない。例えば1オ＜月＞仰不藍(niaṇ pu lam)は A. njang bulēēn＜月神＞よりも C. yaṇ bulan＜月神＞がその漢字音に一致するけれども, この満刺加館訳語の＜月＞に対して記された漢字は占城館訳語の6＜月＞仰不藍と全く同じであるから, 編者はそのような母音における違いを無視して, 占城館訳語の漢字を満刺加館訳語にそのまま使用したと考えざるを得ない。又, 全く逆の現象が見られ, 1オ＜雨＞沾(1ウ＜雪＞胡沾)(xu tṣiəm) は A. hudjēēn, udjēēn ＜雨＞であって C. hujan ＜雨＞とは一致しない。しかし占城館訳語において同じ漢字が用いられており(4＜雨＞胡沾), 二重母音を含む漢字の使われ方には何らかの規則性があるようには思えない。尚, 次のような例があり, 満刺加館訳語に占城館訳語と全く同じ漢字が用いられているが, 以上の理由によってアチェ語, チャ

ム語のいずれかを明らかにし得ない。但し、2オ35<×中>五(u) A. wēh, C. vih <真中>, 9オ243<蛇>虎喇[*(xu la)* A. ulēē, C. ulā, 13ウ363<進貢>魯麻道麻(lu ma ta ma) A. tamuē rumòh, C. tamō' rumo'h <家には入る>, 18ウ500<金>罵(ma) A. mēih, C. mo'h, 10ウ261<倉房>不喇櫟国(占:不喇桑)の桑(sag)は A. sēēng <小屋>, C. sag <家>, 8オ<降真香>把納不格陋<紫檀香>把納格格陋175<波羅密樹>把納格又に通ずる把納(pa na)は A. panaih, C. panat<波羅蜜>, 等は漢字音が単母音であることとチャム語が一致し、次の例も漢字音が二重母音であることとチャム語とが一致する。4ウ194<茴香>格陋(占:革陋)(cai lou) A. gahru, garu, C. gahlāu<沈香, Aquilaria malaccensis>, 9オ206<兎>打非(占:打伯)(ta fei(pai)) A. tupè <りす>?, C. tapai<兎>, 14ウ380<起来>答過(ta kuo) A. tēga <直立した>又は takrah (<ta-krah <起されて>?⁽²³⁾), C. taguauk (但し, C. taguk, tagok の形がある)<起きる>, 16ウ460<綾>不鉄(占:不鉄見)(pu t'is) A. paté'<パティック>, C. pataih <絹織物>, 12オ310<皇帝>波道主(占:波道)(puo tau tgy) A. pôtè <領主, 殿>, pauté <王> shah, C. putau <王>, 8ウ199<牛>喇莫(満:喇弄は誤字? 20オ<緑>衣喇莫 C. aih lamau <牛の糞>参照)(la muo) A. lēmò, C. lamau <牛>。しかし18ウ511<銀>必喇(pi la)は A. pira', C. pariak であってアチェ語に一致し、又、6ウ140<明日>不格不鋭(占:不格)(pu cai pu zuei) A. uròē buka <開く日, 次の日>⁽³⁹⁾, C. paguh <明日>, 2ウ45<×多>羅(luo) A. le, C. lō, lō, 10オ<玳瑁>客南(c'ai nam) A. kēkura, kura-kura, M. kola, kala, C. kurā <陸亀>, 17ウ486<肉>羅(luo) M. lo'lo' <(貝の)肉>?, C. ralui <肉>, 6オ<年>(129<時>)革(cai) A. gò, M. kam, C. kal (←サンスクリット kālā) <時>等はいずれにも一致しない。

しかしアチェ語とチャム語との以上のような母音の差は漢字音では区別し得なかったこと(特にアチェ語 -ēē- を含む語に対して)が編者をして満刺加館訳語に占城館訳語と全く同じ漢字を当てさせたのであろう。又、次のような両訳語に現われる例は単母音を含む例であるが、チャム語のみならずアチェ語にも当てることが出来、満刺加館訳語に記録された言語がアチェ語チャム語のいずれであったのかの決め手が見出せない。3ウ64<水>牙(ia) A. iē, Ol. ya, C. iā, 4オ73<地>打納(ta na) A. tanòh, C. tano'h <土地>, 7オ<蘇木>(186<烏木>)格又哈當(cai iou ha tag) A. kajēē hitam, C. kayāu hitam<黒木>(この場合, 哈はチャム語に合う), 9ウ215<××尾>一姑(i ku) A. iku, C. ikū<尾>, 9オ209<鷄>悶怒(muen nu) A. manò' C. mo'-nuk<鳥>(但し, 満は悶撒(-sa)とあり, 怒が脱字と考えれば manò' sa<一(匹の)鳥>のことか), 12ウ322<父親>阿罵(o ma) A. ama, C. amō' <父>, 15ウ426<口>把八(pa pa) A. babah <口>, Ol. bōba<唇>, C. pabah <口>, 15ウ431<手×>打安(ta an) A. tangan, C. taḡōn <手>, 16オ<×痛>422<×疼>者納(tgis na) A. djana<災難, 苦悩>, C. jano'k<痛む>, 19オ531<文書>蘇喇(su la) A. surat, C. surak<手紙>, 20オ550<天青>喇儀衣陳(la i i tḡ'in) A. idjō langèt, C. hijau lapik <天青(空)(色)>。

X. 満刺加館訳語はチャム語を記録した占城館訳語を元として作成されたことが明らかである。

そこにはチャム語によつてしか解けない語彙、会話文を多く含む外、音韻的、形態的構造もチャム語のそれであった。しかし、それらの現象はアチェ語にも共通したものであり（又、それ故にこそ編者は占城館訳語を元にすることが出来たといえる）アチェ語を記録した可能性も否定し去ることは出来なかった。そのような満刺加館訳語においてアチェ語、又、漂海民語によってしか引当ての出来ないような語彙がある。

この訳語の編者はチャム語とアチェ語との上述のような類似性に気付きつゝも、又、その言語差にも注目していた。それは次のような例によつてうかがい知ることが出来る。

1. 一つの漢語の例に対してチャム語及びそれと同じ意味を持つアチェ語、モケン語を当てた例が、占城館訳語と比較することにより判明する。一種の剩語的用法であるが、このような云い方を実際にしていたかどうかは甚だ疑わしい。6ウ<短衣>失空乙七(ʃi k'uŋ i mie)において失空は Bajau. sangan <夜>、又、乙も 131<夜>乙（但し、チャム語では当て得る語が見出されていない）によって両者が<夜>を表わし、七は M. nek <小さい>、C. nak <短かい>（400<短>七）に当る。同様に、8オ<大楓子>弄者格（又が脱字？）弄(luŋ tʃis cai (iou) luŋ) A. raja, rajə' <大きい> kajèè <木>に C. praun <大きい>（47<×大>弄）が附いたもの。10ウ<倉房>不喇槲国(pu la saŋ kuei) A. brəh, C. brah <米>、A. səŋ, <小屋>、C. saŋ <家>、即ち、<穀倉>に更に M. akang (IX. 3. 参照) <部屋>を加えた（261<倉房>不喇槲）もの。17オ<撒都細布>看不阿必粗(k'an puo pi ts'u) C. khan <布>（475, 476<×手巾>看），A. bunga, C. buŋə' <花>、即ち、<花（模様の？）布>に更に M. pecha <布>（但し、465<布>必相（粗の誤字？））があり、チャム語では当て得る語が見出されていない。恐らく M. からの借用語であろう⁽⁴⁰⁾が附いたもの。21ウ<你姓甚麼>哈勒波及阿南(ha lei puo tʃi o nam) C. halei <何>、A. pakri <どんな>、A. nama, nan, C. no'm, nō'm, aŋan <何というどんな名前>（585<你姓甚麼>海及阿南 hagaik aŋan <何という名前>）もそのような例である。

2. 占城館訳語で用いられている漢字を出来るだけ用いて、正確なアチェ語音を写すことよりも占城館訳語の漢字に若干の変更、追加を行うに留めたと考えられるもの。1オ<雷>胡浪(xu laŋ) A. guròh（3<雷>浪 gram）, 1オ<雲>因 2オ<×雲>阿因(o in) A. awan（2<雲>夜阿因 aih aŋin <風の糞>）, 2オ<雲遮>阿因不者(--pu tʃis) awan pətʃang (<pə-tʃang⁽²¹⁾><雲が（太陽を？）切る、横切る>（30<雲遮>夜阿因者 aih aŋin čaŋ <雲（＝風の糞）が隠す>、6オ<熱>八答哈(pa ta ha) A. pədhə <ひりひりするように辛い、熱い>（135<熱>八答 pa diak）, 13オ<胖子>魯郎(lu laŋ) A. urəŋg ləma' <太った人>（349（胖子）倭郎魯麻 uraŋ lumə'）この例は全く行き過ぎた省略である。恐らく次の例への類推かと思われる。13ウ<瘦子>郎黎(laŋ li) A. urəŋg lia <臆病な人>？（350<瘦子>倭郎黎汪 uraŋ livəŋ <やせた人>）, 16ウ<帶>革衣(cai i) klaih <ベルト>（458<帶>把阿草羊 pə kaŋ <腰ひも>）, 19オ<金葉表文>罵答麻蘇喇(ma ta ma su la) A. məsurat ōn (<daun) məih <金の葉に文書を認める>（525<金葉表文>八答麻蘇喇 məsurak patta <銅板に文書を認める>）。

XI. 以上のように占城館訳語と共通した部分が多いにもかゝらず、又、共通しない部分も少

なくない。それは語彙的な面に限られるけれども、編者、又は、インフォーマントのチャム語以外の
 の現地語に対して持つていた知識の限界を示すものといえよう。以上の各章においても占城館訳
 語とは一致しない満刺加館訳語の例を掲げてきたが（Ⅷ., IX.1,2,4. を参照せよ）、それ以外の
 例としては次のようである。1 オ<星>不撒(pu sa) M. bitoa <星>, 1 オ<風>阿撒因(o sa
 in)A. angèn(この撒という漢字がここにある理由は全く分からない), 1 ウ煙<満喇>(muən la)
 ?⁽⁴¹⁾, 2 ウ<日寒>仰不銳収(niaŋ pu zuei giou) M. yang aloi chengəm <日神(お日様)が寒
 い>?, 3 オ<風来>阿撒因過(---kuo) M. angin, angèn, lakau, makau<風が行く, 来る>, 3
 オ<雨住>沾過(tɕiəm-) M. kujan~<雨が~>, 3 ウ<山>定(tip)Billiton-Maleisch.⁽⁴²⁾kematang
 <丘>?, 3 ウ<海>巨(tɕy) M. teau, Toba Eatak. tao<海>, 4 オ<石橋>不頭高高(pu t'ou
 kau kau) Ol. gẽrẽta' bõto,bõtu <石の橋>?, 4 オ<浪>牙非(ia fei) A. umba'<波>⁽⁴⁷⁾, 4
 ウ<×上>刀(tau) A. atěeh<の上>, 4 ウ<×前>別邦(邦は那の誤字?)(piɛ na) A. pẽnab
 (<pẽnab<前>) <前にして>, 4 ウ<×辺>你(ni) M. dani <近い>?, 4 ウ<水清>牙素
 衣陳(ia su i tɕ'in) A. iẽ djéh idjõ <その水は青い>, 5 ウ<夏>不藍不素(pu lam pu su) A.
 bulěen piɛjé' <狭い月, musém pitjé' <狭期>というのが普通。田に稲が植っている期間>,
 6 オ<時>換(ɕuən) M. hon <回, 度, teloi hon <三回>>?, 6 オ<晝>中(tɕuŋ) M.
 chəng <光, 昼間>, 6 オ<夜>失空(ɕi k'uy) Bajau. sangān <夜>, 6 ウ<明年>吞阿不革
 (t'en o pu cai) A. thōn buka <開く年, 次の年>, 7 オ<松>哈陰(ha im) M. kaun <竹>
 ? , 7 オ17ウ<米>珠(tɕy) M. chon <飯>?, 8 ウ<獅>警農(ceŋ, tɕiŋ nuŋ)U. Kel. kēmōn
 <虎>⁽⁴³⁾?, 9 オ<猪>背蘇(pei su) A. buj djéh<その豚>, 9 ウ<黒猿>夜不啼(iɛ pu t'i)
 A. butin, buting<猿の一種> (19ウ<黒>夜不(但し, 当て得る語を見出せない)であるから不が
 一字脱字), 10オ<満刺加国>冲弄(莫の誤字?)阿喇蘇不鉄(tɕ'uy mɔo o la su pu t'is) A. Paté'
 Sri Mahradja<皇帝, 陛下>(←サンスクリット ɕrī mahārāja)? , 10オ<衛門>格落(cai lo)A.
 kadjuran⁽⁴⁴⁾, 12オ<鍋>満喇(muən la) Karo Batak. bēlanga <浅鍋>?, 12ウ<兄弟>阿愛
 (o ai)M. ooé, uui<弟, 妹>, 13ウ<孀娘>除愛別利(ɕiɛ ai piɛ li, C. saai<兄>, A. balěë, M.
 balui<やもめ>, 即ち,<兄のやもめ>?, 14オ<跪>屈墩(tɕ'y tuen)A. trōn klat<膝を落とす
 >, 14ウ<吃筵宴>八堅客鬧(pa tɕiɛn c'ai nau) A.makěen, M. makan?<食べる> (但し, 語
 頭音が合わない), 15オ<歡喜>哈喇哈(ha la ha) A. harōih <優雅な, 結構な>, 15オ<頭>
 阿直(o tɕi) A. uta'<脳>, M. otak<頭>, 15オ<鼻>動(tuŋ) M. yong, A. idōng, Cl.kělonŋo
 <鼻>, 15ウ<舌>答哈(ta ha) A. lidah<舌>, 15ウ<手指>打安胡六(六胡の倒字?)(ta an
 liou ɕu)Bajau. erike tangān<手の指>, 16オ<血>流(liou)Bajau. laha, A. darah, M. darak
 <血>, 16ウ<綿>花花鉄(ɕua ɕua t'is) Ol. kəkabu <木綿>?, 19オ<讀書>拜哈阿如(pai
 ha o ɕy)A. bēēt<読む>?。又, 「数目門」については占城館訳語と一部分一致するが, アチ
 ㄷ語とチャムとを対照しながら掲げる。20ウ<一>吉(tɕi) A. tělěë, lhěë<三>の誤?(560<三
 >陋klāu<三>), <二>坐(tso) A. dua(559<二>坐 duā), <三>撒(sa) A. sa<一>の誤?
 (558<一>撒 sā), <四>罷(pa) A. pēēt(561<四>罷 pak<四>), <五>麻黎(黎麻の倒字

?) (li ma) A. limòng (IX. 3. 参照)(562<五>黎麻 limö <五>), <六>竹(你(ni)又は您(nim)の誤字?) A. nam (563<六>南nam<六>), <七>的竹(ti tɕiou) A. tudjöh (564<七>底竹 tɕiuh <七>), <八>坂答(答坂の倒字?)(ta puan) A. lapan (但し, 語頭音が合わない)(565<八>打喇板 dalapan), <九>喇手(手喇の倒字?)(ɕiou la) A. sikurëng(566<九>撒喇板 salapan), <十>撒不魯(sa pu lu) A. siplöh (567<十>撒不魯 sa pluh), <百>撒喇(sa la) A. sirëtöih(568<一百>撒喇多 sa ratuh), 21オ<千>阿喇(o la) A. ribèè (569<一千>撒喇瓢 sa ribäu), <萬>撒都(sa tu) A. sila'sa (←サンスクリット lakṣa) (570<一萬>撒喇慢 sa tamò'n)。しかし満刺加語の「数目門」に使われている漢字には上記のように行違い, 倒字と思われるものが多く含まれており, その漢字音とアチェ語音との関係においても正確を期し難い。

尚, 満刺加館訳語と占城館訳語とに共通した漢語, 漢字のうち, Edwards 及び Blagdenが占城館訳語で解くことの出来なかった語彙を, アチェ語, モケン語によって引当ての出来る例がある。2 オ<×長>襖(au) A. 'òh <長さ> (399<長>襖), 3 ウ<井>莫(mu) M. bo <井戸> (66<井>莫), 4 オ<村>敖方(au faŋ) A. umòng <田>? (78<村>敖方), 6 オ<今>来(lai) M. kelai<丁度今>, Mantr.Cast. klaine<今>⁽⁴⁵⁾ (136<今>来), 7 ウ<紅藤>山出者納(ɕan tɕ'y tɕis na)? M. chana <香水の一種, 沈香> (尚, 2 オ<紅雲>山出阿因から<紅>山出であるが, 当て得る語は不明)(187<紅藤>線者納)⁽⁴⁶⁾。

Ⅹ. 満刺加館訳語における借用語としては, 次のものを認めることが出来る。12オ<皇帝>波道主(puo tau tɕy) A. pòtè shah<殿下> ←ペルシア語 shāh, 19オ<文書>蘇喇(su la) A. surat <手紙>←アラビア語 ṣaḥrah, サンスクリットからは7ウ<茴香>格陋(cai lou) A. gahru, garu <沈香>← agaru, aguru, 7ウ<花椒>阿嬌香波来<胡椒>阿七喇不来, 8オ<蘇合油>郎愛慢吞波喇に見える波(不)来(喇)(puo(pu) lai(la))は A. pala<肉荳蔻>← phala<果実>, 8オ<降真香>把納不格陋<紫檀香>把納格格陋に見える把納(pa na)は A. panaih<波羅蜜>←panasa, 又, マライ語からのものとして15ウ<腰>擺羊(pai iap) Mal. pinggang<腰>(cf. A. kē'iēng, kī'iēng, M. keiang<腰>), 17ウ<塩>海喇(ɕai la) Mal. garam<塩> (cf. A. sira, M. chéla<塩>), 次のような語もマライ語起原と考えられる。7ウ<鳥糞泥>喇儀格又邦蘇(蘇邦の倒字?)(la i cai iou su paŋ) A. kajèè langèt sěpěēng <天木(蘇木)>←Mal. sěpang, 8ウ<豆蔻>句甲(阿:白甲)(tɕy tɕa)(pai -) A. gapulaga, gapunaga, kapulaga <白豆蔻>←Mal. kěpulaga, pēlaga(但し, 漢字音にはうまく当たらない)。更に中国語の影響は最も著しく現われている。漢語に用いられた漢字をそのまま対訳語にも使用した例(その漢語に当て得る適当な現地語がなかったか, 又は, 編者が知らなかったのであろう)は, 11オ<墨>黒(阿:墨)(mei), 13オ<銀匠>利匠(18ウ<鐵>利, <銀>必喇よりこの利は必喇の記入違い), <木匠>格又匠(tsiag)の外, 漢字を記すのに用いられた漢字の漢字音(又は, それに近い漢字音)をそのまま記入した例がある。8オ<沈香>(tɕ'im) 幸格陋 A. gahru<沈香>ɕiɕ, 8オ<丁香>(tiɕ)天格陋 A. gahru t'ien, 8ウ<沒藥>(mu)末蘇muo su (蘇は不明。A.djéh<その>? 尚, ペルシア語 mor, アラビア語 murr がその語原), 18オ<醬>(tsiag)生 ɕeɕ, 14ウ<萬歲>(vuan)慢慢吞 A. thōn<年>man man, 18ウ<銅>

(t'ug)董 tuŋ, 18ウ<錫>(si)歇 gie, 18ウ<琥珀>(xu p'ai)古伯 ku pai, 18ウ<水晶>(- tsip)牙人 ia zin, この最後の場合、牙(ia)は漢語の水の部分 A. iě<水>と直訳し、人(zin)は晶の音に似せたものと考えられる。水晶をその字面によって液体の一種と感違いしたのであろう。⁽⁴⁷⁾

尚、語順についても漢語の語順をなぞって対訳語を附けるのが普通であり、例えば、1ウ<清天>衣陳不儀(喇儀?)はそのまま A. idjō langèt とし、2オ<天影>仰不銳弄は A. njang uròë klam に当てることが出来るが、前者はアチェ語の語順としては当然 langèt idjō <青い天>でなくてはならず、後者については漢語の語順と偶々一致して<お日様が陰る>となった如きである(前者のような例の場合に際して、これまでの記述においてはそのことを一々指摘せずにアチェ語、モケン語の語順に従って掲げた)。しかし示された漢語に対して二つ以上の単語を用いた成句によってしか訳せない場合、本来の語順が現われている。5ウ<秋>不藍不黃 A. bulëën pëkhüëng<乾燥させる月>、9ウ<鳳凰>真不刀 A. tjitjém pòtë <皇帝の鳥>等。

本稿は満刺加館訳語解明のためへの一つの接近である。本稿によっても訳語の内容の凡てが明らかになったわけではない。不可解の要素がまだ数多く残されている。こゝに引合いに出されただけの例をもって漢字音に対する対音を決めることも甚だ危険であると思われる。特に満刺加館訳語は占城館訳語を元にして作成されたことが明らかであり(又、そのようにすることを可能にしたのは、語彙的、形態的、音韻的にチャム語と類似したアチェ語がその対象となった言語であることも明らかにした)占城館訳語の研究がまず行われなければならない。しかし占城館訳語と共通しない部分の例についてアチェ語(モケン語)音と漢字音との関係を若干問題にするならば次のことがいえるであろう。

i. 漢字音 -ŋ, -n : アチェ語音ゼロ(又は, -h), 及び漢. ゼロ : A. -ŋ, -n が例外的に現われる。
<髮>櫻 (tsuŋ) : A. (bulëë) sua <むく毛>, <雷>胡浪 (-lap) : A. guròh <雷>, <猿>不啼 (-t'i) : A. butin, buting <猿>, <遮>不者 (- tsië) : A. pëtjang <横切る>, <房>国(kuei) : M. akang<部屋>, <米>珠(tgy) : M. chon<飯>等。

原則的には、漢. -ŋ : A. -ng, -n, -m。

<人>弄(luŋ) : A. urëëng <人>, <問>通(t'ug) : Ol. tun <尋ねる>, <影>弄(luŋ) : A. klam <陰る>等。

ii. 漢. の無気音・帯気音の区別は A. の無声音・有声音の区別に關与しない。

<石>不頭(pu t'ou) : A. batòë <石>, <皇帝>波道(puo tau) : A. pòtë <殿下>, <青>衣陳(i tɕ'in) : A. idjō <青>, <雨>沾(tɕiəm) : A. hudjëën <雨>等。

iii. 漢. の摩擦音・破擦音を同一音を表わすために混同して用いることが著しい。

<寒>収(ɕiou) : M. chengèm <寒い>, <布>必粗(- ts'u) : M. pecha <布>, <晝>中(tɕuŋ) : M. chèng<昼間>, <小>不吉(- tɕi) : A. batjut <小さい>等。

iv. 漢. の l : A. の l, r が原則であるが、漢. l- が A. kl-, kr-, d- に当ることもある。

<蛇>虎喇(- la) : A. ulëë<蛇>, <米>不喇 : A. brëëh <米>, <河>龍(luŋ) : A. kruëng

＜川＞，＜影＞弄(luŋ) : A. klam ＜陰＞，＜魚＞流牙(liou -) : Bajau. déiah ＜魚＞等。

v. A.の末尾子音(-t, -', -b)は漢.では現われない(当時の北京音では末尾子音は既に消失していたからである)。

＜前＞別那(- na) : A. pēnab ＜前にして＞，＜天＞喇儀(- i) : A. langèt ＜天＞，＜浪＞牙非(- fei) : A. umba'＜波＞等。

vi. A.の末尾子音 -h に対して漢.では哈を用いる傾向があるようだが例外が多い。

＜熱＞八答哈(-- ha) : A. pēdéh ＜ひりひりと辛い＞，＜舌＞答哈 : A. lidah＜舌＞，＜七＞的竹(- tsiou) : A. tudjöh ＜七＞，＜十＞撒不魯(-- lu) : A. siplöh ＜十＞等。

注

(1) 石田幹之助「女真語研究の新資料」『桑原博士還暦記念東洋史論叢』昭和26年。氏の所謂丙種本の内、稲葉氏本には満刺加館訳語が欠本となっているが、同本から内藤虎次郎氏本を経て副本の作られた京都帝国大学本には満刺加が含まれている。故に稲葉氏本に欠本とあるのは訂正を要する。

(2) 稲, 阿は共に京都大学文学部図書館蔵。ロは E.D.Edwards and C.O.Blagden : A Chinese Vocabulary of Malacca Malay Words and Phrases collected between A D. 1403 and 1511 (?). BSOS 6, 1930 ~ 2, p. 715~49, 静は泉井久之助「阿波本・静嘉堂本満刺加館訳語の数目門について」『比較言語学研究』昭和24年による。

(3) 同様の趣旨は浅井恵倫氏によっても述べられている(「校本日本語」『安藤教授還暦祝賀記念論文集』昭和15年)。このロの奥付によると、嘉靖28年1月(1549年)に楊林が校正したことが分かる。一方、1303年のマライ語(H.S.Paterson : An Early Malay Inscription from Trengganu. JMBRAS 2, 1924, p. 252~8.), 1521~1522年のマライ語(C.O.Blagden : Two Malay Letters from Ternate in the Moluccas, written in 1521 and 1522. BSOS 6, 1930~2, p. 87~101.) 及び、1521年の Pigafetta の語彙集(A.Bausani : The first Italian-Malay Vocabulary by Antonio Pigafetta. East and West, New Series 11, p. 229~48.) 等によってロの出来た頃のマライ語と現代のマライ語とは語彙的、音韻的に殆んど差がなかったことが分かる。

(4) 16世紀初、ポルトガル人 Tomé Pires は Paramjcura と記した人物。Tomé Pires : Suma Oriental, 日本語訳トメ・ピレス『東方諸国記』大航海時代叢書 V, 1966年10月。

(5) 于是明らかに干の誤字であろう。Tomé Pires は Chaquem Darxa, Xaquem Daraxa と記す。母幹に対し Muhammad を当てることが行われているが、この漢字に対して Mēgat を当てる方がより相応わしく思われる。mēgat は母方が王・貴族、父方が民間人の出である場合の子に対して附される称号。shah はペルシャ語 shāh に由来し、＜主、国王＞のことであるが、『明史』に「(永楽)12年王子母幹撒于的児沙来朝告其父訃」とある如く、偁称であって maha raja ＜大王＞に対して嗣子が raja muda と呼ばれるのに等しい。尚、Parameswara と Iskandar Shah とはその名前をヒンドウ名からイスラム名に代えただけで同一人物とみなす Séjarah Melayu の記述に従った説(例えば R.Winstedt : Malaya and its History. London, p. 34., H.Ahmad : Séjarah Tanah Melayu. Kelantan, 1964, p. 24. 等)と『明史』の記述に従った別人説とがある(例えば C.P.Dartford : A Short History of Malaya. 中国語訳『馬來史略』星加坡, 1959年,

18頁等)が、筆者は後述するように後の説を採用したいと思う。

(6) ロ128 <樹香>答麻兒のように同じ漢字が見える。又、ロ133 <乳香>更地魯干に対して Edwards 及び Blagden は不明としているが、ローマの人 Lewis Wertemanns (Ludovico di Varthema) はその旅行記(1510年)中、マラッカの産物として Sandilium と記したもの(Sir F. Swettenham: British Malaya, New & Revised ed. London, 1929, p.15~16.)で現代語では廃れたが<純度の高い透明な樹脂> sindarus を指したものとすれば、損都廬廝もこれに当てることが出来る。但し、更地魯干の干は司、又は、巳の誤字であろう。尚、伯希和著馮承鈞訳『鄭和下西洋考』台北、中華民國51年、113 頁参照。

又、嘉靖16年(1537年)黃衷編『海語』『滿刺加』の条に現われる語彙、「姑郎伽邪、南和達、哈刺」はロ1 <天>安刺 Allah <神>、ロ294 <老爺> 烏郎加亞 orang kaya <金持ち、高官>に当るものであり、「南和達」は nakhoda <船長>のこと。

(7) 但し、年代を記したものとして清の呂維祺輯『四訳館則』があり、その巻之七「属員」には十館の名が掲げてあるが、滿刺加は含まれていない。

(8) 以下に述べるように滿刺加館訳語は15世紀初頭に作られたと考えられるから、その時代に最も近い漢字音の資料として正統7年(1442年)の『韻略易通』を参照すべきだが、利用し得る研究結果はまだ現われない。本稿では元の泰定元年(1324年)に成った『中原音韻』を当時の北京音を示すものとして、趙蔭棠著『中原音韻研究』上海、1956年重版によりつゝ()の中に記入する。本稿では印刷の都合上、趙蔭棠の表記法の一部を改めた。尚、『中原音韻』は北京音を表わすものであるが、『韻略易通』は純粹の北京音ではない。後者には北京音にない「入声音(?)」があるが、「韻母」に関して両者はほぼ等しい。趙蔭棠上掲書26頁〜、趙蔭棠『等韻源流』上海、1957年、119 頁〜参照。

(9) 占城館訳語は、漢字の若干の不一致を除いて、阿とロとはその分類、配列を同じくする(石田氏上掲論文では稻にも占城館訳語が存在するとなつてはいるけれども、京都大学文学部蔵の写本にはそれを欠く)。ロをチャム語で解いた論文として、E.D.Edwards and C.O.Blagden: A Chinese Vocabulary of Cham Words and Phrases. BSOS 10, 1939, p. 53~91. この論文においてチャム語がインドネシア語とモン・クメール語との奇妙な混成語であることに言及しつつ、この訳語をチャム語で解いている。尚、浅井氏は上掲論文で静の滿刺加館訳語はチャム語に近いと云われている。又、E.D.Ross: New Light on the History of the Chinese Oriental College, and a 16th Century Vocabulary of the Luchuan Language. T'oung Pao II^eSér., T. IX, 1910, p. 693. においてロの占城館訳語はアチェ語に近いと述べている。

尚、占城国は1402年頃から大越国の侵略によってその勢力を失い始め、1471年には亡ぶ。故に占城館訳語の成立は滿刺加館訳語の成立(1405~1414年)よりも早かったと考えることが妥当であると思う。

(10) 成句として例が出ている場合、本章に関係のない漢語の部分は×を記入する。

(11) 不来についての説明はXII参照。

(12) 泉井教授上掲書111 頁。

(13) (2)に掲げた資料からもそのことは確実であろう。

(14) 占城国は15世紀にジャワ、マラッカ等との交渉があった。伝説によれば、ジャワの Majapahit 王国の最後の王 Kértawijaya (1447~1451年)の妃は占城国の回教徒であった(W. Fruin-Mees: Geschiedenis van Java. Deel II. Weltevreden, 1920, p. 4.)。又、Sĕjarah Mĕlayu, §21. には、最後の Chĕmpa 王に Shah Indĕra Bĕrma, Shah Pan Ling と呼ばれる二人の王子がおり、後者は Aceh 王の源となったが前者は Mĕlaka で Sultan Mansur Shah(1459~1477年)の寵愛を受けて大臣に任命され、又、回教に改宗した。

彼が Mēlaka における Chēmpa 人の源となったとある。尚、注目すべきは古城館訳語の中にマライ語からの借用語と思われる語が若干見出されることである。恐らくマラッカとの頻繁な交渉の結果、もたらされたのであろう。167 <豆>不的 (Mal.)pētai <一種の荳科植物 Parkia speciosa>, 185 <蘇木>格又蘇邦 kayāu (Mal.)sēpaq <蘇木 Caesalpinia sappan>, 188 <豆蔻>白喇甲 (Mal.)kapulaga, kēpulaga, pēlaga<白豆蔻 Amomum Cardamomum>, 465 <布>必相(租?) (Moken)⁽¹⁶⁾ pecha <cloth> (Mal.) pērcha <ぼろ>?, 240<亀全>奔牛姑勒 (Mal.)pēnyu <玳瑁> (Cham) kurā <tortoise>。

(15) トメ・ピレス上掲書、特に380頁以下。

(16) Celate はマライ語 selat <海峡>に由来し、現在、orang laut <海の人、漂海民>と呼ばれる。インドネシア近海の沿岸においてその分布範囲は広いが、その中でも有名なものにメルグイ諸島の Moken 人(ビルマ人は Salon, タイ人は Chao Nam と呼ぶ)、マライ半島及びスマトラ島沿岸の狭義の Orang laut (Moken人は Lonta と呼ぶ)、カリマンタン島・セレベス島沿岸からスルー諸島にかけての Bajau 人がある。彼等は Proto-Malay 族に属し、言語も互に類似している。

尚、『明史』巻324列伝第212「三仏齊伝」(現在のスマトラ島パレンバン)の条に「部領陸居，庶民皆水居，編筏築室，繫之於椿，水漲則筏浮，無沈溺患，欲徙則拔椿去」とあり、又、『瀛涯勝覧』舊港(パレンバン)の条にも同様の記述があるが、いずれも orang laut のことを指したものと考えられる。

(17) パセー国とは、現在のスマトラ島アチェ地方にあった古国である。『明史』巻325列伝第213「蘇門答剌伝」には「風俗類滿刺加，篡弑後国名白啞齊」とあり、又、『瀛涯勝覧』「蘇門答剌国」(上掲の『明史』に記されているように蘇門答剌はスマトラ全島を指したのではなく、亜齊(Acheh)を指す)には「言語書記婚喪穿拌衣服等事，皆与滿刺加国相同」とあってアチェとマラッカとは風俗のみならず言語も同じであることを記している。しかしアチェ語とマライ語とは「相同」とは云えず、当時マラッカにおいてアチェ語が優勢に用いられていたことを示していると考えられる。尚、『瀛涯勝覧』同条には現地語として「賭兩鳥(鳥は鶯の誤字?) (tu r ien), 俺拔(am pa)」が出ているが、夫々、アチェ語の driën<ドリアン>, mamplam<マンゴー> (cf. Mal. durian, mangga) に当てたものと思われる。

(18) アチェ語の記録はさほど多くない。最古の資料としては1713年のものがある。P.Voorhoeve: Three old Achehnese Manuscripts. BSOAS 14, 1953, p. 335~345. 又, W.Marsden: The History of Sumatra. London, 1811, p. 203 にはアチェ語の語彙が若干載せられてある。それらの資料からは音韻的、語彙的に現代語との差が殆んど認められない。

(19) H.K.J. Cowan: Aanteekeningen betreffende de verhouding van het Atjèhsch tot de Mon-Khmer-talen. BKI 104, 1948, p.429~514.

(20) 漂海民の言語のうち、Moken 語は M.Blanche Lewis: Moken Texts and Word-list, A Provisional Interpretation. Federation Museums Journal Vol. IV, New Series, Kuala Lumpur, 1960. を、Orang laut 語は H.Kühler: Ethnographische und linguistische Studien von den Orang laut auf der Insel Rangsang an der Ostküste von Sumatra. Anthropos Band XLI-XLIV, 1946~9, p.1~31, 757~785. を利用する。尚、Bajau 語については A.R.Wallace: The Malay Archipelago. New ed. London, 1922, p. 468~493. に附けられた比較語彙で59の諸言語のうちの一つとして記録されたものを用いる。又、Acheh 語は R.A.H.Djajadiningrat: Atjèhsch-Nederlandsch Woordenboek. Batavia, 1934., K.F.H. van Langen: Woordenboek der Atjehsche taal. 's-Gravenhage, 1889., Cham 語は E.Aymonier et A.Cabaton: Dictionnaire Cham-Français. Paris, 1906. による。但し、Acheh語, Cham 語は、表記法の一部を改めた。

- (21) A. pē- (唇音の前で pu-), C. pa-はいずれも語根に附いて使役形を作る。Cowan. op. cit. p. 435. A. C. 共に前鼻音化現象を起こさない。IX.1.参照。尚, 泉井教授上掲書128 頁以下。
- (22) W.W. Skeat and C.O. Blagden : *Pagan Races of the Malay Peninsula*. Vol. II. London, 1906. の巻末に附けられた比較語彙, House. 153. の項を参照。
- (23) A. té- (ta-), 又, C. ta- は語根に附いて偶発的な受身を表わす。Cowan. op. cit. p. 435.
- (24) Skeat and Blagden. op. cit. Hair. 1. の項参照。
- (25) Pigafetta. op. cit. No. 271. al scrivere : magnurat 参照。
- (26) Edwards and Blagden (1939) op. cit. はチャム語に対して surak patta mo'h <金の平板の文書>と解する。
- (27) A. mē- (唇音の前で mu-), C. mō-はいずれも語根に附いて再帰, 相互の意味を持つ動詞を作る。Cowan. op. cit. p. 436.
- (28) 但し, モケン語, 漂海民語にはマライ語的な前鼻音化現象があり, これらの言語が語彙的に満刺加館訳語に影響を与えたとしても, その形態部は及んでおらず, アチェ語に借用語を供給したに留る。
- (29) 尚, K.F.H. van Langen : *Handleiding voor de beoefening der Atjehsche taal*. 's-Gravenhage, 1889, p. 14., E. Aymonier : *Grammaire de la langue chame*. Saigon, 1889, p. 39, Cowan. op. cit. p. 433. 参照。
- (30) 泉井教授上掲書122 頁以下。
- (31) Skeat and Blagden. op. cit. Tiger. 138. の項参照。
- (32) Cowan. op. cit. p. 459.
- (33) この現象はインドネシア語派に属する諸言語に広く行われたようである。但し, その行われ方は一様ではない。例えば Mal. bintang <星>は M. bitoa, C. batuk の形から生じたものである (尚, bitoa を原初的な語根の形とみなすこと出来ない。Ahtiago. tói, Matabello. tóin <星> (Wallace. op. cit. 参照) から更に二つの意味的な要素から成っていることが分かる)。又, ジャワ語 (Ngoko) の数詞, loro <二>, telu <三>, papat <四> etc. が限定的に用いられる場合, -ng をとって rong taon <二年>, telong djam <三時間>, patang etc. となるが, カウイ語の小辞 -ng <~の, その> と関係があるのか, 単なる発音の傾向なのか明かではない。
- (34) Bouton. mákuni, Masaraty. koni, Teor. kúni <黄色の> (Wallace. op. cit. 参照)。
- (35) IX. 2. に述べたような語頭音脱落現象と関連して, アクセントのない第一音節がその母音を落して次の子音と consonant cluster を形成したことが明らかな例 (trôn <turun, klam <kélam> もあるが, モン・クメール系の語については (kruēng, kruēt), 直ちにそのように判断することは出来ない。尚, <柑子> 古怪の古は A. C. と他例から考えて不必要であり, こゝにある理由を詳らかにすることが出来ない。
- (36) 漢字音はロの出来た年代 (1549年) に近い明末の順天音を示す。陸志韋「記徐孝重訂司馬溫公等韻圖經」『燕京學報』第32期, 1947年による。
- (37) Cowan. op. cit. p. 448~, p. 458. 参照。
- (38) A. njang, Mal. yang, nyang は関係代名詞である。しかし Mal. yang (-yang) <神> のような用法もあり, これはカウイ語 hyang <神> に由来する。前者は nya-ng, ia-ng <その彼> から出た形であるが, 後者と syncretism <融合> を起こした。又, 以下のように C. yap は <神> のこと。
- (39) タガログ語 bukas <明日> も bukás <開いた> と同語原である。

(40) 『明史』「三仏齊伝」の条に「苾布」、同「滿刺加伝」の条に「白苾布」という漢語が夫々の国からの貢物として出ている。この漢語の意味は明らかでないが、17オ<白苾布>山花苾粗という例があり苾(必)粗は現地で織られた一種の布を指していたものと考えられる。尚、(44)も参照のこと。

(41) Cajeli. melün<煙> (Wallace. op. cit. 参照)。

(42) A.G.Vorderman : Bijdrage tot de kennis van het Billiton-Maleisch. TBG 34,1891, p. 373~400.

(43) Skeat and Blagden. op. cit. Tiger. 133.の項参照。

(44) アチェ国王に従う官吏の一つの職名。Marsden.op. cit. p. 402. 参照。

(45) Skeat and Blagden. op. cit. Now. 110. の項参照。

(46) 又、漢語を説明的に訳したとしか考えられない個所がある。インフォーマントがその漢語に直ちに当る適当な対訳語を知らなかったこと、又は、その漢字に対する訳語がなかつたことに由来するのであろう。1オ<霜>多沾(to tɕiem), 1ウ<天陰>儀因多(i in -), 2ウ<月明>仰不藍多(niag pu lam -), 6オ<陰>因多, 6ウ<長夜>多多失空(-si k'up)に現われる多がモケン語 ada <大きい>に当たるとすれば、夫々、A. hudjēn ada <雨が大きい>, A.langèt ada awan <天は雲が〜>, A. njang bulēn ada <お月様が〜>, A. awan ada <雲が〜>, Bajau. sangen ada-ada <夜が〜>, 但し、4オ<林>多格(-cai)に対しては A. kajēn ada <木が〜>となり、問題は残る。

(47) 液体に係する漢語に対して強いて牙(ia) A. iē <水>という漢字を附けようとする傾向がある。3ウ<水>牙を元に1ウ<氷>八牙, 4オ<泉>牙哈, 4オ<浪>牙非 A. umbā', 17ウ<醋>打牙, 18オ<油>羊牙(羊(iag)は米(mi)の誤字?) A.minjē' <油>, 9オ<魚>流牙 Bajau. déiah. このような傾向は、一つの漢字音に対して現地語の一つの決った音価を与えようとする試みを困難にする。

(補1) 泉井久之助教授の Edwards and Blagden (1939) op. cit. に対する紹介、批評(『言語研究』第5号, 昭和15年5月)も参照せよ。